

(11) 聖徒の交わり

村上伸

イザヤ書 55 章 10 節-11 節
マタイによる福音書 18 章 18 節-20 節

使徒信条の第三項では「聖霊を信ず」という言葉の次に「聖なる公同の教会」という言葉がつづいて、先週はこのことについてお話ししました。今週は「聖徒の交わり」ということについてお話ししたいと思います。

「聖徒の交わり」ということについては歴史的にみますと色々な解釈がありまして、例えばカトリック教会では、聖人たちの功績が天にたくわえられていて、それが、あまりいいこともできない凡人であるわれわれにも与えられる、そういう意味での「交わり」があるという解釈もあります(諸聖人の通功)。また、聖餐式のことを言っているのではないかという解釈もあります。しかし、私たちは単純に、キリストを信ずる者の交わりが清い交わりであるという、そういう意味にとっておきたいと思います。プロテスタントでは基本的にはそういう方向で理解されています。私もそう思います。つまり教会について前のところでは「聖なる公同の教会」ということがいわれ、それに続けて「聖徒の交わり」であるといわれているわけでしょう。

教会というのはわれわれが人間的関心に基づく何らかの目的を持って集まって来てそしてそこで形成したグループではない。神によって呼び集められた群れです。このことを先週お話ししました。ギリシャ語の「エクレシア」というのは、「呼び出された者たちの群れ」という意味です。私たちの関心によって作り上げ、そこで何かをもくろむということではなく、神によって呼び出された者の群れというのが教会なのです。この点、イザヤ書 55 章 10 節以下の言葉は大事なことを私たちに教えてくれていると思います。

「雨も雪も、ひとたび天から降ればむなしく天に戻ることはない。それは大地を潤し、芽を出させ、生い茂らせ種蒔く人には種を与え、食べる人には糧を与える。そのように、わたしの口から出るわたしの言葉もむなしくは、わたしのもとに戻らない。それはわたしの望むことを成し遂げわたしが与えた使命を必ず果たす。」

ここでは言葉としてははっきり出ていませんが、神の言葉を受けて、それを語って、それをこの歴史の中で、ある働きに結びつける群れというものが想定されています。そのことを抜きにしてただ抽象的に言葉だけがどこかを舞っているということではないのです。「私の口から出るわたしの言葉もむなしくは、わたしのもとに戻らない」雪や雨が降ると大地にうるおいを与え花を咲かせたり実を結ばせたりして天に戻ってゆく。丁度そのように、神の言葉というものはこの歴史的な世界の中である働きをするのだ、それを担うのが教会だと考えてよろしいと思います。

さて、「聖徒の交わり」ということについて一般に誤解されている面がありますので、先ずその誤解をただしておきたいと思います。これは一般によくみられる誤解でありまして、教会というのは要するに聖人君子の集まりであるかのように考える。ですから教会にいられて間もない方が「私のような人間はまだ仲間に入れて頂く資格がない」とか「洗礼を受ける資格がない」とか、謙遜のつもりでおっしゃるのでしょうか、そういうことを言われます。教会というところは立派な人たちの集まりだという考えがある。しかし、これは誤解だと思えます。

もちろん、極悪人の集まりというわけではありませんけれども、聖人君子の集まりと理解するのも同様に誤解だと思えます。さらにまた、その期待が裏切られたとき「何のことはない、教会も偽善者の集まりだ」という評価に変わり、教会から去ってゆく人がいます。これも誤解です。教会は聖人君子の集まりでもなければ偽善者の集まりでもありません。「聖徒の交わり」というのはそういったレベルの問題ではない。ちょっとくすぐったい気がしますが、教会に集まってくる私たちが聖書は「聖徒」と呼んでいます。そう呼ばれるのは、私たちがほかの人々に比べて特に優れているからではありません。私たちは全く同じ人間です。ほかのすべての人々と同じように、よいところも少しはあるかもしれないが、欠点も持っている。優れたところも劣ったところも、その割合はめいめい違いますけれども、両方をもつ人間なのです。私たちはみんなそうです。聖人君子というわけでもないし、だからといって偽善のかたまりというわけでもない。キリスト教徒もそうではない方達と全く同じようにふつうの人間です。ですから「聖徒」と呼ばれるのはちょっと身の程過ぎたことだという気持ちがいたします。

しかし聖書が「聖徒」と呼ぶのは、そういうごく普通の人間がただ神によって呼び出され、神の言葉を語るという使命にともにあずかって共同体を形づくっているという、ただそのことによっています。ほっておけば自分のために生きることしかしないような私たちを、目的と使命を与えて共に生きるように選んで下さった。その神の恵みに対するおそれの心が「聖徒」という呼び方の背後にあります。ですから自慢して「聖徒」というのではなくて、神に対するおそれから、また感謝から自分たちのような者も選んで下さったという謙遜な気持ちで告白しているのです。教会が「聖徒の交わり」と言われるのは、第一にそういうことだと思えます。

いくらか似たような例を引いて説明したいと思いますが、私はよく子供の教育に携わっている方々のことを考えます。優れた教育者というものは、ある子供の能力が他の子供よりも少し劣っているということがあるからといって、あるいはちょっとグレたからといって簡単に見捨てたりはしませんね。どのような子供でも固有の可能性をもっているということを信じている。だから簡単にあきらめたりしない。その子供に与えられている可能性をひき出すために忍耐をもって、時には励まし時には刺激を与えということを行います。どんな子供に対しても、尊い人格として接する、本当の教育者というのはそういうものだと思います。

私自身そういう先生に出会いました。それが自分にとってどんなに有り難いことであったかということを終生わすれることはできないと思います。こういった場合は、前提になっている考え方は、どんな子供にも可能性があるという考えでしょう。

ですから私たちが「聖徒」と呼ばれるのはそれとちょっと似ている所もありますが、やはり違う。どんな子供にも可能性があると思っていてそれを引き出そうというのが教育であるとすると、私たちが聖徒と呼ばれる場合は、われわれの側の可能性はおよそ問題にされていないのです。「どんな人間にも可能性があるから」というような考え方はしていません。それは問題にならないのです。可能性とか素質とかそういうことは一切問わない。ただ神がお選び下さった。そのことだけに目を注いでそれをおそれ、そして感謝する。聖徒という呼び方にはそういう意味あいがあると思います。

それからもう一つの例を引いてみたいと思いますがそれはインドのガンジーです。インドにカースト制度というのがあって、その一番下の階層に不可触民というのがいる。私もちょっとだけインドに行ったことがあります。バンガロールというところに神学校があってそこに滞在したのですが、そこでドイツ人の宣教師が教えていて、その家にお世話になったのです。その家に夜遅くまで働いているおばあさんがいてトイレの掃除とか汚い仕事だけをしている。どういう人なのですかと聞いたら、それが一番低いカーストの不可触民であるということでした。そういう人たちが一番汚れた仕事をする。教会の中でさえ今だにそういう差別が行われています。ガンジーはそういう人たちを「ハリジャン」、つまり神の子と呼んだということは有名です。世間から最もないがしろにされている人々こそが神の子である。この考えはわれわれが聖徒と呼ばれているのと、意味からいうと近いかもしれませんがやっぱりちょっと違う。不可触民だからハリジャンだということですからないのです。人間の側の条件は一切問わない。ただ神によって呼び出された者たちであるということだけに注目して、ただその故に聖徒と呼ばれるのです。

ですから「聖徒の交わり」という時は、人間の側の才能とか可能性とか身分とかそういったものは一切問われないのです。逆に言いますと、教会の中でそれが問題にされるということはあってはならない、ということでしょう。あの人はどういう身分の人だとか、あの人はどういう経済上の力を持っているとか、あの人はどういう可能性を秘めているとか、あの人にはどういう学歴があるとか、そういう人間側の条件は一切教会では問題になりません。その意味で、私たちはすべて聖なるともがらです。神によって愛され、神によって大事なものとされている聖なるともがらである。教会が聖徒の交わりだというのはそういうことだと思います。

使徒言行録の20章にパウロがエフェソの教会の長老たちに別れを告げた時の言葉があります。「どうか、あなたがた自身と群れ全体とに気を配ってください。聖霊は、神が御子の血によって御自身のものとなさった神の教会の世話をさせるために、あなたがたをこの群れの監督者に任命なさったのです。」(28節)

ここには「神が御子の血によってご自分のものとなさった神の教会」という言葉がありますが、これが丁度それに当たるとおもいます。私たちの側の条件によるのではない。「神が御子の血によってご自分のものとなさった」がゆえに、それは「聖なる公同の教会」と呼ばれあるいは「聖徒の交わり」と呼ばれる。そういうことでしょう。そういう意味で、教会は聖人君子の集まりでもなければ偽善者の集まりでもない。

「神が御子の血によって御自身のものとなさった神の教会」です。ですからわれわれ

の側の条件は一切問題とされません。もしこの点で誤解があって「まだ自分にはそういうところに入るような条件がととのっていない」というように考えてためらっていらっしやる方がいたら、その心配は捨てていただきたいと思います。

もう一つ、私の気にかかっている誤解がありますので、そのことについても述べたいと思います。それは、教会というものをロマンチックな意味で同じような気持ちになった人々が連帯意識をもって作っているグループであるという考えです。これについては、ボンヘッファーが書いた論文のことをお話ししなければなりません。ボンヘッファーという人は私の話にときどき出てきますが、ドイツの神学者でナチスに抵抗して処刑された人です。この人は早熟の天才と言われました。二十一歳のときにベルリン大学に学位論文を提出し、それが最優等という大変優れた評価を得て学位を受けました。この論文が「聖徒の交わり」というのです。今だによく引用される程すぐれたものですが、この論文の終りの方にこういう文章が出て参ります。

「信仰がもっとも純粹に教会を体験するのは、青年運動のように同じ気持ちにさせられた者がロマンチックな連帯意識をもつ交わりの中ではなくむしろ、教会の交わりの外では個々人を結びつけるものは何も無いようなところすなわちユダヤ人とギリシャ人、敬虔主義者と自由主義者が互いにぶつかりあい、それにも拘らず一致して自分の信仰を告白しともに聖餐に進んで互いのために祈る、そういうところにおいてである。」

その頃彼は二十一歳ですから青年運動にも少々首をつっこんでおりまして、青年運動の中ではしばしばその時の高揚した気分の中で、同じような感激を味わった人たちが同志的な結合を深めてロマンチックな連帯主義を高めるということがよく起こりました。彼もそれは経験したのでしょう。しかしそういうものではないというのですね。

そうではなくて個々人の人間を結びつけるものが何もないところ、具体的に言うとユダヤ人とギリシャ人、あるいは敬虔主義者と自由主義者という風に非常に異質なものがぶつかり合いにも拘らず一致して自分たちの信仰を告白し合う。あるいは一緒に聖餐式にあずかる。そしてお互いのために祈りあう。そういうところで聖徒の交わりというものは体験されるというのです。

私がもう一つの誤解と言ったことは、それに関連しています。つまり、教会ではみんな同じ考えにならなければいけないかのように考える、そういう誤解です。何もそんな風に考えなくたっていいと、二十一歳のボンヘッファーは言ったのです。青年運動の体験をした後で、彼はそういうところに聖徒の交わりというものを考えてはならないと言ったのです。

教会ではみんなが同じような考えでやってゆかなくてはいけないものだと考えすぎますと、それは一つの危険を含むようになります。といいますのは少しでも意見の食い違いが起こると、それを何かとても悪いこと、教会にふさわしくないことのようにして、無理してそれを覆いかくそうとするか、あるいは無理やりに不協和音を排除して形式的な一致を求めるか、そういうことになりやすいからです。

そういうロマンチックなところで一致を考えていると、それはただちに異分子を排除する論理に変わります。同じような考えでなければいけないと無理やり考えると、排除の理論が必ず出てくる。聖徒の交わりというのはそういうものではありません。異分子を排除するところで成り立つような、そういうものではない。違う考え方の人も許容します。聖徒の交わりというのはタフでなければいけません。ちょっとでも違う考え方の人が出てくるとこれは困ったと考える必要はないのです。

私は若い頃そうでした。ちょっと潔癖すぎるところがあって自分の考え、あるいは自分とごく親しい人々の仲間の考えでないような考えに出会うと、ちょっとこれは困ったというように考えてしまう。私の失敗の多くはそのことに関係がある。ある時アメリカの神学者が言った言葉で目からうろこの落ちるような経験をしました。それはどういうことかと言うと「意見が違ってもいい」というのですね。その人は英語で“セレブレイション・オブ・ディファレンシズ”といました。違いがあってもそれを皆で喜び祝うということです。世界のすべてのものは神様がそれぞれ違ったものとしておつくりになった。動物でもあんなに沢山違う種類のものがあるし、人間でも同じ性格の人ばかりじゃない。色々な違いをもった人が共存しています。その中に豊かさがあるではないかというのです。一つの考えでまとまらなければ悲劇的だなどと考える必要は何一つないのです。恐らく違いを喜んだり楽しんだりすることの中に神の国というものが考えられているのではないのでしょうか。軍隊のように右へならえと言えば一線にならぶ、そういうことではなくて、一人一人がそれぞれ自分の個性を自由に発揮できるようなところ、しかし最後のところでは、そういうすべての人々が神様に大切にされている、そのことをお互いに信じあう、そしてお互いのために祈ることができる、それが聖徒の交わりというのではないのでしょうか。ボンヘッファーが言っているのもそういうことなのです。

その意味で「また、はっきり言うておくが、どんな願い事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心をつにして求めるなら、わたしの天の父はそれをかなえてくださる。二人または三人がわたしの名によって集まる場所には、わたしもその中にいるのである」(マタイ 18 章 19 節)という言葉の意味が、私には前よりもよくわかる気がいたします。「あなたがたのうち二人が地上で心をつにして求めるなら」と書いてありますが、この「二人」という言葉の意味は、違うということではないのでしょうか。一人として同じ人間はいません。そのうちの二人がそれぞれ心の中に違うものを持ちながら、「地上で心をつにして求める」ということが起こる。それが教会です。

二人または三人がわたしの名によって集まる場所」とも書いてありますが、その場合も同じだと思います。人間というものは一人として同じ人間はいません。それぞれ考え方も経験も違う。その違うもの同士、つまり「二人または三人が、私の名(イエス・キリストの名)によって」集まる。それが教会です。「聖徒の交わり」というのはそういうところに成り立つものです。今日のお話はその位に致します。

(日本基督教団みくに伝道所 1997 年 3 月 9 日礼拝説教)